

道徳科教材の教材分析に関する一考察 — 道徳性曲線の活用を通して —

山田 貞二
岐阜聖徳学園大学教育学部

Considerations Regarding the Analysis of Teaching Materials for Moral Education Courses: The Use of Moral Curves in Analyses

Teiji YAMADA

Abstract

A degree of trial-and-error is still seen at Japanese schools in creating lessons for moral education courses. This paper presents considerations on methods of scientifically analyzing teaching materials. The main concept considered is that by tracing the moral curves of persons introduced to a specific teaching material, teachers can gain a view of the teaching material as a whole, while at the same time the moral curves thus made explicit can be used to clarify the characteristics of the materials. These characteristics can then be correlated with the six types of teaching-materials usage, to further strengthen the scientific analysis of each specific teaching material.

In the analyses of teaching materials using moral curves, materials are classified into seven types. Then, we ascertained how their respective characteristics are suited to developing and improving teaching and guidance. The moral curve extends and develops the emotion curve hitherto used within schools, and the moral curve also expresses, in a succinct manner, a single moral value. Specifically, inasmuch as human understanding and values understanding are shown in the form of a curve, the values embedded in the teaching materials can be analyzed. This paper thus considers methods for clear and distinct analyses of teaching materials and is therefore aimed at contributing to the improved creation of school classes.

Key words : teaching materials analysis, moral curve, six types of teaching-materials usage

I. 背景と目的

小学校は2018（平成30）年度、中学校は2019（平成31）年度に道徳の教科化が完全実施された。教科書が無償配付され、学校現場では、この数年間において、教材分析をはじめとした様々な授業研究が進められ、授業のあり方が大きく変化してきた。文部科学省による「令和3年度 道徳教育実施状況調査」によると、「道徳の『特別の教科』化を受けた変化」に対する回答で、「道徳教育に対する教師の意識が高まった」という設問に対して肯定的な回答（とてもそう思う、どちらかというと思う）をしている学校の割合が小学校も中学校も95%を超えている¹⁾。

また、2020年に始まった新型コロナウイルス感染症の拡大による話し合い活動の制限とそれに並行するような形で実施を前倒しして行われたGIGAスクール構想による一人一台端末の配付は、授業づくりに大きな影響を与えてきた。話し合いの制限を、ICT端末の機能を使って補っていくという研究が進められ、大きな効果をあげている取り組み事例も見られるようになってきた。

しかし、テクノロジーを駆使した授業展開に目が向くあまり、教材自体の解釈や特色を把握した上での教材研究が旧態依然とした現状が見受けられるようになった。学校現場の研修等で授業づくりの状況を尋ねると返ってくる答えのほとんどは「教材研究の時間がない」「どのように教材研究をしてよいか

分からない」というものであった。先述の「令和3年度 道徳教育実施状況調査」によると、小中学校全体の52.6%の学校が「教材の吟味や授業構想のための時間の確保」を道徳科の授業を実施する上での課題としている²⁾。では、忙しく、どのような授業を行ったらよいのか不安を抱えている教員は、どのように授業づくりをしているか。同調査において「道徳教育の充実のために参考にしている情報」という調査項目がある。「教科書発行者が出版している指導書や参考資料等」という回答が最も多く、84.0%という驚くべき数字が示されている。限られた時間の中で、指導書や教師用教科書（いわゆる「赤刷り教科書」）を参考に授業を行っている実態が浮かび上がってくる³⁾。

こうした状況から、同報告書は、「調査結果からは、道徳の『特別の教科』化の趣旨を踏まえた『考え、議論する道徳』への質的転換について一定の成果は見られるものの、コロナ禍における対面での研修や優れた授業実践を見る機会の減少、教材研究にかかる時間の確保等が制約要因となっている状況もうかがえる。したがって、道徳教育の要としての道徳科のさらなる授業改善、教師の指導力の維持・向上や、そのための研修機会等の充実は喫緊の課題である」と課題を示している。

本研究は、そうした現状を改善するため、教員が限られた時間の中で、効率的に教材自体の特性を分析する力をつけるための教材分析の方法を確立することに焦点を当てて研究を進める。

Ⅱ. 道徳科の教材における教材分析の方法

1. 学習指導要領解説における授業づくり

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説の「特別の教科 道徳編」では、授業づくりの手順を「学習指導案作成の主な手順」として（ア）ねらいを検討する（イ）指導の重点を明確にする（ウ）教材を吟味する（エ）学習指導過程を構想するという4つの段階に分けている⁴⁾。

筆者は長年の学校現場における授業づくりの経験と先行研究より、（ア）（イ）の手順を「素材研究」という手法を活用して行うこと、（ウ）の手順を「道徳性曲線」を活用した教材の吟味を行うこと、そして（エ）の手順を「道徳教材の活用6類型」を活用して行うことを提案するとともに、学校現場の教員が効率的で効果の高い授業づくりができるような教材分析の方法を示す。

2. 素材研究

国語教育学者の野口芳宏は、「教師面をひとまず捨てて、一人の大人、一人の読者として素材の作品、文章そのものに正対し、十分にその内容や構成、長短、魅力を吟味、検討した上で初めて『教材研究』に挑むべきなのだ」と素材研究の重要性について主張し、授業づくりは素材研究に50%、教材研究に30%、指導法研究に20%の割合で行うことが大切であるとしている⁵⁾。

また、道徳科の授業は、児童生徒の多面的・多角的な考え方から対話や議論が行われる。教師面をして教材分析をすることにより、教師の一面的な見方になる可能性が非常に高くなる。多面的・多角的な教材研究を進めるには、多面的・多角的な素材研究が必要となってくる。本研究では、チームとして数名の教員がモデレーションを行いながら素材研究することにより、一人一人の教員が多面的・多角的な素材研究を行うことができる資質や能力を身につけることができると考える。

3. 道徳性曲線を活用した教材の吟味

（1）道徳性と道徳性曲線の定義

小中学校学習指導要領（平成29年告示）解説の「特別の教科 道徳編」において、道徳性について「道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道徳性を構成する諸様相である道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲と態度を養うことを求めている」と定義している⁶⁾。道徳科の教材には、様々な人物が登場してくる。これらの人物の「人間としてよりよく生きようとする人格的特性」を教材のストーリーに沿ってどのように変化していくかを主観的に表現したのが道徳性曲線である。筆者は、道徳性曲線について「主人公等の登場人物の道徳性の正負を授業者の主観的な判断で時間の経緯と共に曲線に表現したもの」と定義し、本研究を進めることとした。

（2）心情曲線と道徳性曲線

道徳性曲線は筆者が提唱するものであるが、これまでに心情曲線を使って教材分析を行った先行研究がある。筆者は、この心情曲線を発展させた形で道徳性曲線を活用することを考えた。

では、心情曲線との違いはどこにあるのか。図1は、鈴木由美子と宮里智恵が小学校の定番教材であ

る「手品師」の分析を、心情曲線を活用して行ったものである。

鈴木と宮里は、この心情曲線を活用して次のように、この教材を分析している⁸⁾。

「このように心情曲線を使って教材分析をすると、授業でおさえるべきポイントがわかりやすくなります。この場合、①で手品師の現状をおさえ、②で男の子の前で手品をしたときの手品師の気持ちを、充分引き出します。③で手品師が何に悩んでいるか、困っているかについて子どもに考えさせます。④で手品師の悩みの根拠について考えさせます。大劇場に行くとしたら何を大切にしているのか、何に困るのか。男の子との約束を守るとしたら何を大切にしているのか、何に困るのか。ふたつの考えを交流させ、両方が納得する考え方はないか、話し合いを深めていきます。⑤で手品師が男の子との約束を選んだわけについて考えさせます。授業のヤマ場は④です。心情曲線で見ると、主人公の心情が2段階落ちたところです。ここにしっかりと時間をかけます。中心発問は⑤です。ここは価値に迫るところです。④の話合いが十分できていれば、子どもたちはいろいろな表現で価値観を示してくれることでしょう」。

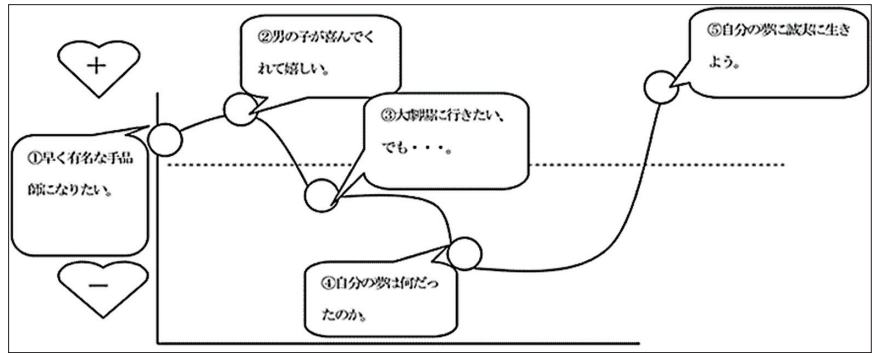


図1 教材「手品師」の主人公の心情曲線⁷⁾

教材全体を俯瞰し、主人公の心情を客観的に見取ることができる優れた手法である。しかし、二つの点で改善が必要である。一点目は、道徳的心情に重きが置かれ、道徳的判断力、道徳的意欲と態度からの視点が無いという点である。二点目は、この心情曲線には、様々な道徳的価値が加味されてくるということである。例えば、この「手品師」の場合には、「誠実」という内容項目以外に「友情、信頼」、「希望と勇気、努力と強い意志」などの道徳性が混在している。したがって、指導者が授業づくりをする際に、発問がねらいから外れてしまったり、発問間のつながりがなくなってしまう可能性があると考えられる。

これらの課題を解決するためには、道徳的心情だけでなく、道徳的判断力や道徳的意欲や態度を含めた道徳性の動きを、ねらいとする道徳的価値にのみ絞って表現することが必要となってくる。それが、本研究で活用する「道徳性曲線」である。道徳性の諸様相は分離することが難しいため、3本の線とはせず、よりよく生きようとする人格的特性が表れているかどうかで曲線を描き、曲線はあえて1本の線で表現する。

これら課題を解決するためには、道徳的心情だけでなく、道徳的判断力や道徳的意欲や態度を含めた道徳性の動きを、ねらいとする道徳的価値にのみ絞って表現することが必要となってくる。それが、本研究で活用する「道徳性曲線」である。道徳性の諸様相は分離することが難しいため、3本の線とはせず、よりよく生きようとする人格的特性が表れているかどうかで曲線を描き、曲線はあえて1本の線で表現する。

(3) 道徳性曲線と教材分析との関連性

道徳性曲線は、登場人物の道徳性を時系列で分析するため、心情曲線同様に教材全体を俯瞰して見取ることが容易となる。

道徳性曲線は、主人公等の登場人物の道徳性の変化を曲線に示す。0を示す基準線より下に曲線がある場合は、道徳性が低い状況にあり、人間理解を中心とした話し合いを設定しやすい場面となり、逆に基準線より上に曲線がある場合は、道徳性が高い状況にあり、価値理解を促進する話し合いが可能な場面となる。

また、大きく曲線が変化する転換点は、主人公が葛藤し、よりよく生きるための決断をする転換点となるので、中心発問等を設定する重要なポイントとなる。ここに示したスタンダードモデルは、教材が「起承転結」で完結する最も多いタイプの道徳性曲線となり、実際には、様々なタイプの教材が

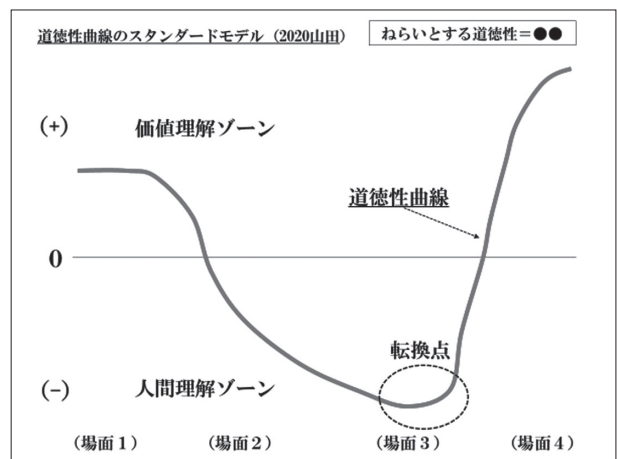


図2 道徳性曲線のスタンダードモデル

存在している。それらを、この道徳性曲線を使って分析することにより、教材分析の時間が大幅に短縮することができる。また、何度も繰り返すが、この道徳性曲線はあえて主観を前面に押し出して取り組むため、数名でのモデレーションが必要となることを確認しておく。

4. 道徳教材の活用6類型

素材研究で教材のもつ価値を多面的・多角的に把握し、授業のねらいを設定するとともに、道徳性曲線を活用した教材の吟味により教材の構成や特色を確認したら、最後に行うのが授業展開の構築である。白紙の状態から授業を構築することは時間もかかり、教員にとってかなりの負担となる。それに対して、道徳性曲線の活用から導き出した教材の特性によって、おおよその指導展開が見通せる活用類型があれば、授業づくりも容易となってくる。

青木孝頼は、資料（教材）自体を分類するのではなく、展開前半に限っての資料（教材）の活用の仕方によって、「共感的活用」「批判的活用」「範例的活用」「感動的活用」の4つに分類している⁹⁾。筆者は、教科化以降の「考え、議論する道徳」に対応できるように、この4類型に加えて、「分析的活用」「問題解決的活用」の二つの類型を加えて6つの類型をもとにして指導展開を検討することを提案する。そして、図3のように、これらの類型を展開前半だけでなく、指導展開全体を見通したものに再構築を行った。

道徳性曲線による教材分析から教材の特徴を導き出し、これら6類型を参考にしながら授業展開を構築していけば、授業づくりは科学的、効率的に行うことができると考える。当然ながら、教員の負担軽減にもつながる。

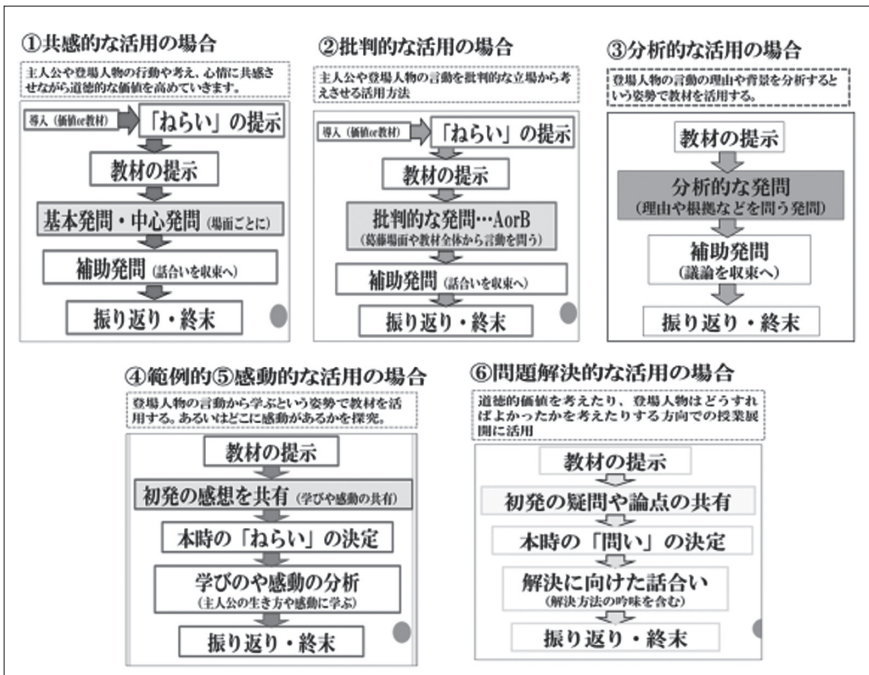


図3 教材の活用6類型と授業展開例

Ⅲ. 考察～道徳性曲線と教材分析～

1. 素材研究と多面的・多角的な分析

図4は、筆者が主催する研究会において、小学校の定番教材「うばわれた自由」を読んだ初発の感想から代表的なものを抜粋したものである。この教材は、自分勝手な振る舞いをするジェラル王子と規則を守ることを生きがいとするガリューという二人の人物の対比を中心に「自由」について考えさせる教材である。図4からも分かるように、参加した現職教員43名中35人がAのようなガリューを善、ジェラルを悪と捉えていた。それに対して学習会に参加した15名の学生のうち12人が、二人の自由に対する違いを認めつつ、どちらか一方を正しいとするのではなく、それぞれの考え方の違いを指摘していた。一面的な教師脳をもって教材に向かうことにより、多面的・多角的な教材分析が阻害されることを示した事例である。学生の考え方からモデレーションを行うことにより、登場人物二人の考え方の違いをクローズアップした多面的・多角的な素材研究が可能となった。

A 現職教員の初発の感想（抜粋）

- ・勝手な振る舞いをして結果的に、我が身にそれが降り掛かった ジェラル王子の様子から、自業自得だと思った。
- ・決死の覚悟でジェラル王子に訴えたガリューは、勇気のある本当にすごい人だと思います。しかし、もし友達だったらそれほど仲よきはなれないかもしれません。固すぎる、融通が利かないという印象があります。
- ・ガリューは、自分の考えがわかってもらえる世の中になればいいと思ったのでしょうか。ジェラル王以外の市民はわかっていたけど、「王」が国のきまりを崩し秩序を壊したから、ジェラル王は半屋へ行くことになった。
- ・やりたいことをやるだけが自由ではなく、社会のきまりや周りの人への思いやりをもって行動することが自由と考えます。

B 学生の初発の感想（抜粋）

- ・王子はルールを窮屈だと言っていたことに対して少し共感した。誰もがガリューのようにルールの意味を理解し積極的に守っているのではなく、仕方が無いからという消極的な理由でルールを守っていることに気づかされた。
- ・素直に、ガリューはすごいと思った。みんなから怖いと恐れられている王様に対しても、自分の死を覚悟して、正しいことを必死に訴えたからである。自分だったら、考えを主張できないと思った。
- ・「自由」に焦点が当てられている中で、「きまり」に関する言及も多くあった。「きまり」の上で成り立つ「自由」を軸とするガリューと、「きまり」ではなく「自己」が主となる「自由」を軸とするジェラル王子とは、「自由」の想像図が違ふと感じた。
- ・きまりは、どのような立場の人であっても破ってはいけないと考えるガリューにも、きまりを守ることは窮屈であり自由に暮らした方が楽しいと考えるジェラルにも、大なり小なり共感することが出来た。

図4 教材「うばわれた自由」における初発の感想（2022.3.12 A to Z道徳授業学習会より）

この結果から、教員が素材研究をする際も、一人で行うのではなく、チームとしてモデレーション行うことが有効であることがわかる。ただ、一人で行う際には、自分自身の中で多面的・多角的な見方をするよう、常に心掛けて素材研究をする必要がある。

2. 道徳性曲線を活用した教材分析による教材の分類

(1) 道徳性曲線の描き方

素材研究を経て、その教材を使用して児童生徒に何を考えさせるのかという目標が決まってくる。つまり、めあてとする道徳的価値（内容項目）が決定する。そして、その道徳的価値にそって、教材の主人公や登場人物の道徳性を道徳性曲線に表現する。道徳性曲線は、指導者が主人公等の登場人物の言動からその道徳性を主観的に測ることを原則とし、道徳的判断力、心情、意欲と態度を総合的に判断することとなる。道徳的心情は高いが、意欲や態度に欠けるという場面もあるが、どれか一つでも高い道徳性があれば、総体としては＋と考える。それは、三つの諸様相が関連し合っているから、一つだけマイナス方向に向かうということは考えられないからである。道徳性の高さは、曲線の高さで表現し、三つとも高い状態が、曲線が最も高い状態と捉える。

(2) 道徳性曲線による教材の分類

道徳性曲線を活用して、様々な教材を分析していくと、道徳科の教材をいくつかに分類することができる。また、その形状から授業展開を構想することが容易になってくる。以下にその分類と授業展開との関わりを提示する。

① 起承転結型

小中学校の道徳の教科書に最も多い型である。いわゆるハッピーエンドを基本とする起承転結型のストーリーが展開される。小学校に多い。

- ・「承」の段階で道徳性がかなり低くなるが、「転」の場面を経て道徳性が高くなっていく。
- ・転換点や「結」の場面を中心場面とすることで発問や指導展開が作成しやすくなる。
- ・展開は6類型のどの展開例にも対応できる万能型である。

図5のように、人間理解と価値理解がバランスよく配置されており、授業構想しやすい。

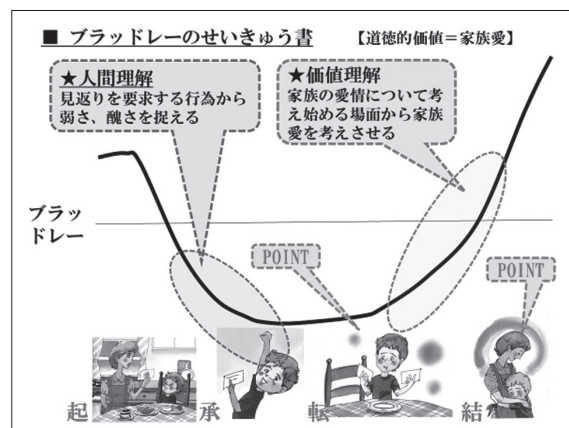


図5 起承転結型の道徳性曲線

② 未解決事件型（余韻型）

起承転結の形はとっているものの、終末においてははっきりとした結果が表現されていない型の教材である。終末段階で、主人公が考え始める場面であったり、葛藤し始めたりする場面が描かれることが多く、ハッピーエンドに近づく寸前でストーリーが終わっている。「裏庭での出来事」「二通の手紙」「いつも一緒に」「雨のバス停留所で」といった教材は、終末段階を中心場面として設定し、共感的、分析的、問題解決的なアプローチがしやすい教材の類型となっている。中学校の教材に多い型でもある。

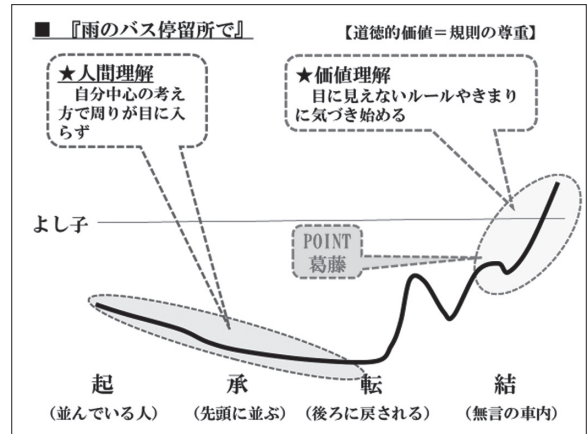


図6 未解決事件型（余韻型）の道徳性曲線

③ 未解決事件型（ゼロベース型）

この型の教材は、最後まで問題が解決されることなく、また解決への糸口もなく終了するストーリーとなっている。児童生徒にとって、何も無いところ（ゼロベース）から問題解決をすることを迫られる教材の型である。

特徴は、道徳性曲線が終盤においても大きくマイナスになっていることである。こうした教材は、問題解決的な指導展開が最もふさわしく、ダイナミックな展開が期待される教材である。

図7の道徳性曲線を見て分かるように価値理解にあたる場面がほとんどなく、児童生徒自身で価値理解を図っていかなくてはならない。教材中の人物の低い道徳性を引き上げるといった活動が重要になってくるのである。

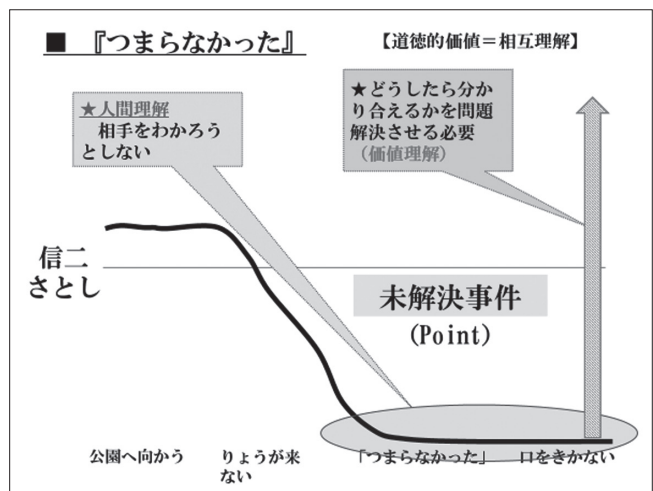


図7 未解決事件型（ゼロベース型）の道徳性曲線

④ ジレンマ葛藤型

この教材の型は、道徳性曲線が、最後に0付近にとどまっているという特徴を持っている。しかも、道徳性が大きく揺れ動くという波形を表わす。最後まで主人公の考えや行動が定まらないという状況にあるということである。主人公がジレンマを抱えたり、葛藤したりしている状況にあることを示している。

したがって、こうした教材は、最終の段階から後を児童生徒自身に考えさせていく必要がある。

そうすると、必然的に、問題解決的で二項対立的な授業展開になってくる。つまり、批判的な指導展開になっていくということである。「自分ならばどうするか」「主人公はどうすべきだろうか」（問題解決的）、「主人公の行った行動をどう思うか」（批判的）というような発問につながってくる。葛藤やジレンマに自我関与させながらの授業展開が最も効果的となることが分かる。

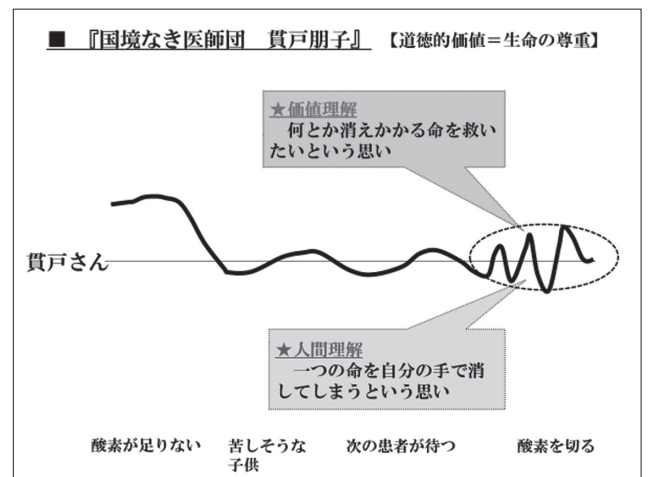


図8 ジレンマ葛藤型の道徳性曲線

⑤ 対比型（複線型）

このタイプの教材は、一人の人物の道徳性の変容を問うのではなく、複数の人物の道徳性の対比から道徳的価値について考えさせることができる教材である。一方の人物が道徳性の高い言動をし、もう一方の人物は低い道徳性の言動をするというストーリーが展開される。

したがって二人の違いを考えさせる分析的な指導展開や二人の言動を批判的に考えさせるような指導展開が必然的に考えられる。小学校の定番教材である「うばわれた自由」もこのタイプになる。中学校の定番教材「二人の弟子」もこのタイプと考えてよい。

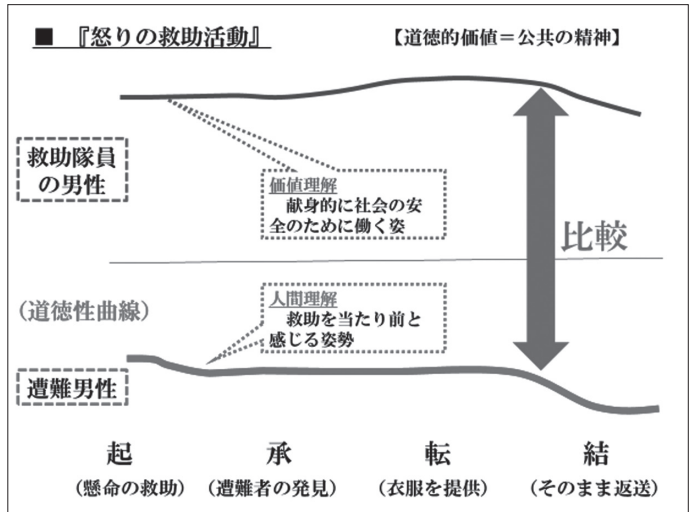


図9 対比型（複線型）の道徳性曲線

⑥ 問題提起型

このタイプの教材は、全般的あるいは終末段階において問題提起的な内容が示されるところにある。

最終段階で、葛藤的やジレンマ的になるものの、登場人物の道徳性を問う場面となっていることが多い。

葛藤ジレンマ型とよく似ているが、この道徳性曲線では、児童生徒に「どうすべきか」と問うというよりは、主人公の言動の結果についてどう捉えるかということを考えさせる構成になっている。そして、そこに道徳的価値が問題提起的に内包されている。小学校の定番教材である『手品師』もこのタイプであると捉えることができる。

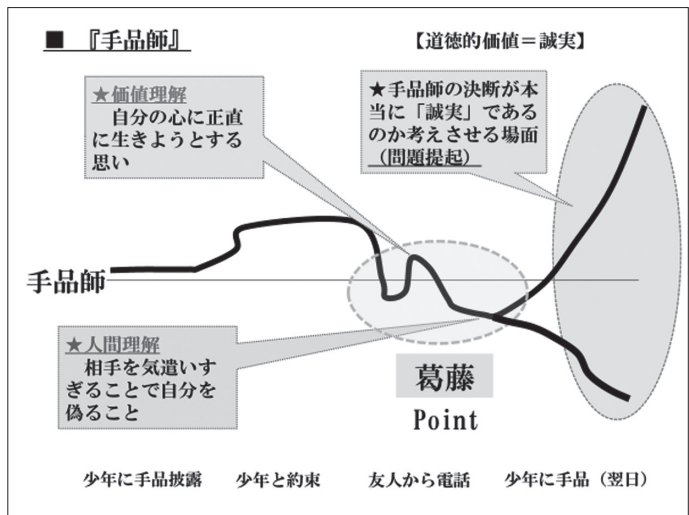


図10 問題提起型の道徳性曲線

批判的な活用と問題解決な学習の展開が一般的となり、複数の道徳的価値を含みながらの授業が展開される。他の展開も考えられるがこの方法が最も効果的となる。

⑦ 感動・偉人範例型（ハイポジション型）

このタイプの教材は、自特徴は、道徳性曲線がフラットラインよりもプラスの領域にあることが多く、教材の中に価値理解の要素が存分に詰め込まれていることである。自然や生命尊重、畏敬の念などのDの視点の教材や偉人を扱った教材に多いタイプである。

したがって、このタイプの教材は、教材から学ぶというスタンスでの展開がふさわしいこととなる。いわゆる分析的な授業展開がベストとなる。そうした際に、この授業の中で人間理解を扱う部分が減ってしまい、「きれいごと道徳」「うわべ道徳」になりがちである。そこで、低い道徳性にある自分自身をしっかり見つめさせることが必要となってくる。高い価値にある教材を児童生徒自身に近づけるということである。したがって、「自分には何ができるか」「何を学んだか」「生かせることは何だろうか」というような発問が必要となる。

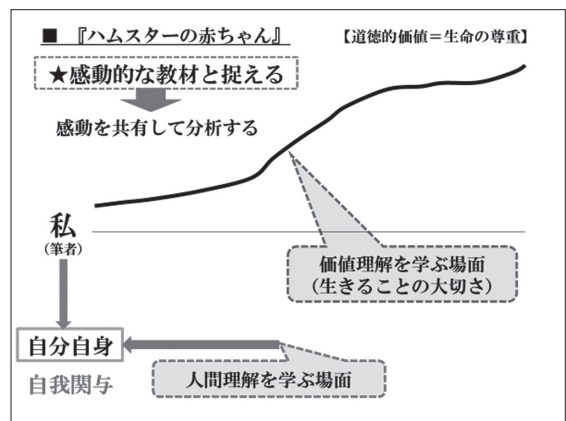


図11 感動・偉人範例型の道徳性曲線

Ⅲ. 結論と今後の課題

道徳科の授業で使用される教材は、道徳性曲線を使ってその特徴を分類することができ、表1に示すように、その分類により、教材の活用6類型と関連させ、おおよそその指導展開を構想することができることが分かった。指導者が、教科書会社作成による指導書を見ることなく、自身の明確な指導観に基づき、授業づくりをするための有効な手段である。道徳性曲線を描くことにより、教材全体を俯瞰することができ、教材活用6類型と関連させることにより、授業構成が極めて構造的で創造的なものになると考えられる。

この関連図の有効性については、さらなる研究と考察、そして実践による検証が必要である。特に以下の3点における実践研究を必要としている。

(1) 素材研究と道徳性曲線との連続性

素材研究からねらいとする道徳的価値を明確にし、教材と特徴を掴むことはできるが、それをどのように道徳性曲線に反映させるかが明確になっていない。

(2) 関連図の有効性の検証

これまでの筆者の授業づくりや学校現場における研修会から導き出した関連図であるが、これらが実際に学校現場の教員の授業づくりにどれくらい貢献されるのかを検証する必要がある。

(3) 発問づくりとの関連研究

本論文では、発問づくりにまで言及することができていない。道徳性曲線を活用した発問づくりの在り方について今後研究を深め、明確な事例提示をする必要がある。

表1 道徳性曲線による教材の分類と教材活用6類型との関連図

	①共感的活用	②批判的活用	③分析的活用	④範例的活用	⑤感動的活用	⑥問題解決的活用
起承転結型	◎	○	◎	△	△	○
未解決事件型 (余韻型)	○		○			◎
未解決事件型 (ゼロベース型)			○			◎
ジレンマ型		◎	○			◎
対比型(複線式)	○	◎	◎			○
問題提起型	○	◎	○			◎
感動・偉人範例型 (ハイポジション型)	△		○	◎	◎	

◎最も適している ○適している △教材によっては適している

注・文献

- 1) 文部科学省(2022):令和3年度道徳教育実施状況調査報告書, 24.
- 2) 文部科学省(2022):令和3年度道徳教育実施状況調査報告書, 15-16.
- 3) 文部科学省(2022):令和3年度道徳教育実施状況調査報告書, 22-23.
- 4) 文部科学省(2017):小学校学習指導要領(平成29年告示)解説「特別の教科 道徳編」, 81.
- 5) 野口芳宏(2018):「素材研究—その必要性」, 実践国語研究 No. 346, 明治図書, 34-35.
- 6) 文部科学省(2017):中学校学習指導要領(平成29年告示)解説「特別の教科 道徳編」, 17.
- 7) 鈴木由美子、宮里智恵編著(2012):「やさしい道徳授業の作り方」, 溪水社, 61.
- 8) 鈴木由美子、宮里智恵編著(2012):「やさしい道徳授業の作り方」, 溪水社, 61-62.
- 9) 青木孝頼(1988):「道徳でこころを育てる先生」, 図書文化, 98-117.